人間文化創成科学論叢　第24巻　2021年

シューベルト・リート≪憧れ *Sehnsucht*≫D 310の分析
―T.G. ゲオルギアーデスの「文肢 Glied」の概念を手がかりとして―

添　田　久美子*

Die Analyse Schuberts Lieds "Sehnsucht" D 310
nach dem Begriff des *Glieds* bei T.G. Georgiades

SOEDA Kumiko

Abstract

Franz Schubert（1797-1828）vertonte das Gedicht *Nur wer die Sehnsucht kennt* aus "*Wilhelm Meisters Lehrjahre*"（1796）von Johann Wolfgang Goethe（1749-1832）. Es ist als das Lied "Sehnsucht" D 310（1815）bekannt, das eine erste und zweite Fassung hat. Wenn man auf die Gesangsmelodie achtet, bemerkt man, dass die Einschnitte der Phrasen mit denen der Verse nicht immer übereinstimmen, und sie über die Fassungen unveränderlich bleiben. Der griechische Musikologe Thrasybulos Georgios Georgiades（1907-1977）analysierte "Wandrers Nachtlied" D 768 in seiner Schrift "*Schubert; Musik und Lyrik*"（1967）. Darin begreift er die syntaktische Beziehung des Gedichtes basierend auf dem Begriff des *Glieds*（Georgiades 1967: 19）. Es ist das Ziel dieser Forschung, zu erleuchten, wovon die Phrasen von Schubert-Liedern abhängen und wie sie komponiert wurden. Dabei schütze ich mich auf den Begriff des *Glieds* bei Georgiades und versuche, die erste mit zweiten Fassung von "Sehnsucht" D 310 zu vergleichen und sie zu analysieren. Wie das Verhältnis zwischen die Einschnitte der Phrasen und die Verse zeigt, wollte Schubert das Gedicht nicht nur als das Künstliche（a.a.O: 29）, sondern auch als das Natürliche（a.a.O: 30）betrachten, besser gesagt, als das wirklichere Sagen. Die Gesangsmelodie von den Schubert-Liedern konnten die menschliche lebendige Sprachen möglich machen, das nicht von der Form des Gedichtes abhing.

Keywords：Franz Schubert, deutsches Lied, T.G. Georgiades, Syntax, Glied

1．研究目的

シューベルト（Franz Schubert 1797-1828）は、1815年10月18日にゲーテ（Johann Wolfgang Goethe 1749-1832）の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1796）に含まれる詩「ただ憧れを知る人のみNur wer die Sehnsucht kennt」（第４巻、第11章）に、異なる二種類のリートを作曲した。これらは≪憧れ[(1)] *Sehnsucht*≫D 310の第１稿と第２稿として知られる。本研究は、D 310の二稿の分析を通して、シューベルトのリート創作における詩の捉え方と音楽の関係を考察するものである。

≪憧れ≫D 310の歌唱旋律に注目すると、フレーズの切れ目が詩行と必ずしも一致していないこと、また稿を改めても、このフレーズの切れ目は維持されていることがわかる。こうした詩とフレーズの一貫した扱いは、シューベルトのリート創作が詩の形式を超えたところに音楽的構想を得ていたことを示唆する。

キーワード：フランツ・シューベルト、ドイツ・リート、T.G.ゲオルギアーデス、統語論、文肢

＊平成29年度生　比較社会文化学専攻

ギリシア出身のドイツの音楽学者ゲオルギアーデス（Thrasybulos Georgios Georgiades 1907-1977）は、著書『シューベルト 音楽と抒情詩』（*Schubert: Musik und Lyrik*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1967）の中で、≪さすらい人の夜の歌 *Wandrers Nachtlied*≫D 768について詳解な分析を行っているが、その際彼が用いた「文肢 Glied」（Georgiades 1967: 19）の概念に焦点を当てた。それによれば、ゲオルギアーデスが分析の際に基準としたのは、詩行そのものではなく、主語と述語から成る「文」であったこと、またその「文」構造を成立させる構成要素を「文肢」と呼んでいること、さらに文はフレーズとなり、文肢はフレーズをつくり上げる楽句となって相互に機能し合っていることが見て取れる[(2)]。つまり、ゲオルギアーデスの文肢による分析法は「文肢」という統語論的概念に基づく点で、18世紀から19世紀にかけてのリート作曲についての見解や、その後20世紀の代表的な先行研究が、詩行や韻律といった「詩形式」や内容に注目してきたのとは一線を画している[(3)]。例えばクラウゼは「音楽家は詩人と共通の意図を創り出すために、詩人と同じ方法を選ぶ。」（Krause 1752: 48）、「詩人が構想を練り、作曲家はそれに従わねばならない。」（ebenda: 48）と述べて、詩人の創り出した詩行はリートの構造に強い影響力を持つという見方を示したが、こうした考え方が18世紀から19世紀にかけてのリート作曲に一般的なものだった（村田 1984）。その後20世紀におけるリート研究においてはこうした歴史的背景を踏まえて、シューベルトのリートもまた、詩行や韻律、また内容に対して音楽がいかに表現されているかに注目して分析されてきたのであり、そこにはこうした詩形式の上での詩と音楽の相互一致という前提があったといえる[(4)]。

一方、ゲオルギアーデスは、言語を「文学や音楽の上位に置かれるもの」（Georgiades 1954: 3, 1967: 24）と見なしていた[(5)]。すなわち彼にとっての言語とは「現実的なもの Reales」（Georgiades 1967: 24）としての「発話 Sagen」（a.a.O: 104）を意味し、それは詩の上位に置かれた。また*Schubert-Enzyklopädie*（2004）においては、「ゲオルギアーデスはシューベルトを、リートを音楽的構造として実現した最初で最後の作曲家であると強調した」ことが示され、「ゲオルギアーデスによれば、詩人が言葉の素材から詩を創り出すのに対し、シューベルトは言葉の素材からリートの音楽の実体と構造を創り出す」として、「構造」の点から詩とシューベルトのリートとの差異を指摘している[(5)]。以上のことから、シューベルトのリートは詩とは異なる固有の構造を獲得していると考えられ、統語論に基づくゲオルギアーデスの文肢の概念は、それを明らかにする鍵を握っていると仮定した。

本研究は、≪憧れ *Sehnsucht*≫D 310の二稿において、シューベルトのリートの構造とはどのように創り出されたのかを、ゲオルギアーデスの「文肢」の概念を手掛かりとして明らかにすることを目的とする。

2．研究対象と方法

シューベルトは、リート創作において同一の詩に複数の付曲をする、いわゆる「改作」を数多く手がけている。≪憧れ *Sehnsucht*≫はなかでも改作回数の多い作品の一つである。このリートは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1796）の中の詩にシューベルトが付曲したものであるが、同詩への付曲はD 310（1815）、D 359（1816）、D 481（1816）の3回にわたっており、先述の通りD 310は同日に付曲された第1稿と第2稿を持つ。その後、≪憧れ≫はさらに1826年に≪『ヴィルヘルム・マイスター』からの歌曲集 *Gesänge aus „Wilhelm Meister“*≫において、＜ミニョンと竪琴弾き *Mignon und der Harfner*＞D 877-1として、また＜ミニョンの歌 *Lied der Mignon*＞D 877-4として付曲された。すなわち同じ詩に対して6回もの付曲が行われたことになる。本論はそのうちの最初期にあたるD 310の第1稿と第2稿を取り上げ、ゲオルギアーデスの文肢の概念を援用し、フレーズ、詩行、統語構造のそれぞれの切れ目に着眼し、二稿の比較分析を試みる。

本論で扱う「統語」を、筆者は一般的・日常的ドイツ語のための規範として捉えている。したがって、「統語」的側面と、芸術作品としての「詩形式」的側面は区別される。また本論では詩形式の意味するものを詩行と定め、韻律・内容は含まないものとする。

3．詩行と統語構造、「文肢Glied」

ゲーテの詩*Nur wer die Sehnsucht kennt*は、以下のように読まれる。

Nur wer die Sehnsucht kennt,	ただ憧れを知る者だけが
Weiß, was ich leide!	私の苦しみをわかってくれるのです！
Allein und abgetrennt	たった一人で隔てられ
Von aller Freude,	あらゆる喜びから（隔てられ）、
Seh' ich ans Firmament	私は天空を見つめています
Nach jener Seite.	あの世に向かって。
Ach! der mich liebt und kennt	ああ！私を愛し、わかってくれる人は
Ist in der Weite.	遥か遠いところにいるのです。
Es schwindelt mir, es brennt	そう思うと私はめまいがして煮えくり返るのです
Mein Eingeweide.	はらわたが。
Nur wer die Sehnsucht kennt,	ただ憧れを知る者だけが
Weiß, was ich leide!	私の苦しみをわかってくれるのです！

（筆者訳）

ゲオルギアーデスが著書『シューベルト 音楽と抒情詩』において行った≪さすらい人の夜の歌*Wandrers Nachtlied*≫D 768の分析のように、まずゲーテの詩を一つの文を形成しているところで区切って並べ替えると、以下の５つの文に分けられる。次に歌唱旋律におけるフレーズの切れ目に「／」を記す。尚、④、⑤の部分は第１稿と第２稿で歌詞のリフレインの仕方が異なるため、それぞれ示した。（例　④[1]：第１稿, ④[2]：第２稿）

図１　詩行と統語構造、文肢　（V：詩行）（筆者作成）

① Nur wer die Sehnsucht kennt, ／weiß, was ich leide!／
← V.1 → ← V.2 →

② Allein und abgetrennt von aller Freude,／seh' ich ans Firmament／nach jener Seite.／
← V.3 → ← V.4 → ← V.5 → ← V.6 →

③ Ach! der mich liebt und kennt／ ist in der Weite.／
← V.7 → ← V.8 →

④[1] Es schwindelt mir,／ es brennt mein Eingeweide.／
← V.9 → ← V.10 →

④[2] Es schwindelt mir,／ es brennt mein Eingeweide.／es brennt mein Eingeweide.／
← V.9 → ← V.10 →

⑤[1] Nur wer die Sehnsucht kennt,／ weiß, was ich leide!／
← V.11 → ← V.12 →

Nur wer die Sehnsucht kennt,／ weiß, was ich leide!／weiß, was ich leide!／
← V.11 → ← V.12 →

⑤[2] Nur wer die Sehnsucht kennt,／ weiß, was ich leide!／
← V.11 → ← V.12 →

Nur wer die Sehnsucht kennt,／ weiß, was ich leide, ／der nur weiß, was ich leide!／
← V.11 → ← V.12 →

図１より、ゲーテの詩行は統語構造に関係なく、文の途中で改行がされていること、またシューベルトの歌唱旋律におけるフレーズの切れ目は、必ずしも詩行と一致していないことが見て取れる。この「／／」で括ったまとまり、これがゲオルギアーデスの述べる「文肢 Glied」である。文肢は、主文と複文の関係であったり、主語としての名詞句、あるいは目的語としての名詞句、またそれらを修飾する副詞句など、それぞれの役割を持つ構成要素として細分化され、相互に関連し合いながら一つの文を作り上げている。したがって、シューベルトの付曲は詩行に対してではなく、文肢に対してのものであり、それによってフレーズが創り出されていることになる。以下で具体的に観察していく。尚、図１で示した文①～⑤を「文構造①～⑤」と示す。

４．D 310の第１稿と第２稿における共通部分と異なる部分

第１稿と第２稿を並べてみると、第２稿は図１で示した文構造①～③までは伴奏バス声部（第５、９、11小節）に若干の変化が見られるものの、第１稿の主調であるAs-Durから短三度下のF-Durに単に移調されていることがわかる。しかし続く文構造④および⑤においては、二稿の間に差異が現れる。したがって、これより第１稿と第２稿の共通部分と異なる部分について述べていく。

4-1　二稿における共通部分

（１）文構造①　（第１－４小節、第１－２詩行）

第１詩行は文構造①の主語に当たる名詞句（主部）であり、第２詩行は動詞weißとwas以下のweißの目的語となる名詞句とともに述部となって一つの文を形成する。そのまとまりは、第１稿ではバス声部において順次上行するas音からes^{1}音[(6)]まで、第２稿ではf音からc^{1}音までの一続きで表現されている。しかしその一方でこの主部と述部はそれぞれ文肢と見なされ（図１　①参照）、歌唱旋律、伴奏のいずれにおいても反復する音型、あるいは変化（奏）形で関連付けられている。つまりゲオルギアーデスが≪さすらい人の夜の歌*Wandrers Nachtlied*≫D 768の分析において述べた「シンメトリー分節法」(Georgiades 1967: 20, 25)[(7)]がここでも指摘でき、それによってこれらの文肢はフレーズの切れ目を創り出している。

（２）文構造②　（第５－11小節、第３－６詩行）

文構造②は３つの文肢を含んでおり（図１　②参照）、それらはそれぞれ副詞句－主文－副詞句としての役割を持つ。第５小節でas-moll、第６小節半ばでH-Dur、第８小節でh-mollに転調しており、これらの転調が文肢と対応していることがわかる。しかしAllein―Freude、seh'―Firmamentにおけるフレーズの終わりはそれぞれ属和音であることから前進あるいは継続を志向しており、第3-6詩行が一続きであることを表している。伴奏バス声部もdes音からas音を頂点としてes音までのアーチ型を描いており、このこともまた文構造②のまとまりを表現しているといえよう。

（３）文構造③　（第12－16小節、第７－８詩行）

文構造③は２つの文肢を含んでおり（図１　③参照）、第７詩行に当たる最初の文肢が主語を表す名詞句であり、次の第８詩行に当たる文肢は述部の役割を持つ。その際、前者はCes-Dur、後者はh-mollとなっており、異名同音で読み替えつつ短調に変化させて、ここにある種の切れ目を創り出している。その一方でここに現れた新しい伴奏音型である、バスの２分音符に対して伴奏上声部［８分休符＋同音の８分音符・４分音符］が、文構造としてのまとまりを表す要素となっている。

以上のように、各文肢の切れ目は転調で表されている一方で、文構造①および②のフレーズの終わりが属和音であり、文構造③の終わりが主和音であることから、文構造①～③までを大きなフレーズのまとまりとして捉える音楽的構造が見て取れる。

4-2　二稿における異なる部分

第１稿はSehr langsam, mit Ausdruck（非常にゆっくりと、感情をこめて）と指示がある。主調はAs-Durで

拍子は２分の２拍子、全35小節の楽曲である。一方、第２稿はSehr langsam, mit höchsten Affekt（非常にゆっくりと、極めて感情を高ぶらせて）と書かれている。主調はF-Durで拍子は同じく２分の２拍子、全39小節あり、間奏、レチタティーフを含んでいる。以下でさらに詳しく差異を見ていく。

（１）文構造④　第１稿（第16－19小節、第９－10詩行）

第9-10詩行はゲーテの詩では、以下のように文の途中で改行されている。

Es schwindelt mir, es brennt
Mein Eingeweide.

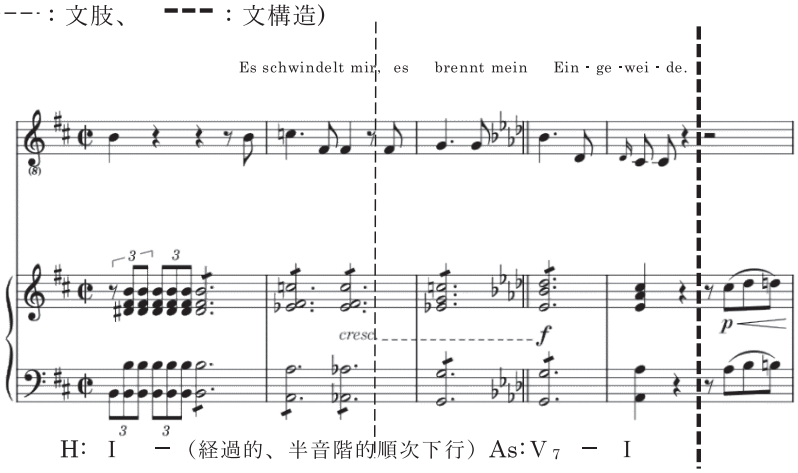
しかしながら第９詩行のEs－mirまでが１つの文であり、第９詩行の後半es brenntから第10詩行の終わりEingeweideまでがもう１つの文である。文構造④はこれらの２つの文から成る複合文であり、それぞれの文を文肢と見なす（図１　④[1]参照）。まず第9-10詩行が２つの文から成る複合文であることは、新しい伴奏音型として現れる 3 連符の同音反復によって示されている。またそのまとまりは、伴奏バス声部がH-Durの主和音からAs-Durの主和音に向かって経過的かつ半音階的に順次下行形をたどる音型によっても表される。一方、２つの文肢は、歌唱声部の 8 分休符によって区切られている。（譜例１参照）

（２）文構造④　第２稿（第16－20小節、第９－10詩行）

第16小節に「Recit.」の表記がある。第２稿ではシューベルトはゲーテの詩行を３つの文肢に区切り直し、それにはes brennt以下の繰り返しも含まれる（図１　④[2]参照）。伴奏バス声部はAs音からC音まで順次下行していること、また伴奏上声部とバス声部によって作り出されるトレモロの音型が現れることで文構造④のまとまりが表されている。その一方で上述のシューベルトによる３つの文肢は、歌唱旋律における８分休符によって区切られ、Es－mirはb-moll、es brennt以下は繰り返し部分も含めてF-Durとなっている。休符や転調によって文肢が表されているものの、あくまで２つの文からなる複合文という構造も同時に示されている。（譜例２参照）

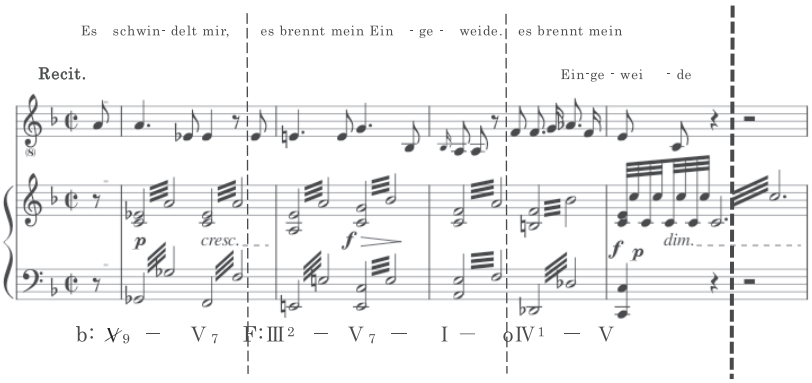
譜例１[(8)]　**D 310（第１稿）　文構造④（第16－19小節、第９－10詩行）**

（－－－：文肢、　━━━：文構造）



譜例２　D 310（第２稿）　文構造④（第16－20小節、第９－10詩行）

（----：文肢、 -----　：文構造）



（３）文構造⑤　第１稿（第20－30小節、第11－12詩行）

第11-12詩行は第1-2詩行と同じ歌詞である。文構造⑤はNur―kennt, とweiß―leideを２度繰り返し、さらに原詩にはないがweiß―leide のみ繰り返される。すなわち５つの文肢を含んでいる（図１ ⑤[1]参照）。歌唱旋律において １ 回目のNur－leideは冒頭と同様、シンメトリー分節法によって文肢の切れ目がわかる。また２回目では前半の文肢Nur－kenntと後半の文肢weiß―leide は、Ces-Durからh-mollの転調で区切られ、付加的な最後の文肢weiß―leideもas-mollに転調している。しかし文構造において、１回目のNur―kenntとweiß―leideは冒頭部同様バス声部の半音階的順次上行形によってひとまとまりにされている。２回目の場合もやはりバス声部のces音からh音に至る一続きによってまとまりが表されている。和声進行の点からは１回目と２回目のNur－leideは半終止で繋げられ、さらに２回目はⅥ度の和音によって偽終止され、その後にweiß―leideが続く。偽終止もまた続行を予期させる技法であるため、文構造⑤は最終的に終止定型をとってAs-Durの主和音に到達するまで一続きとなっていることがわかる。またweiß―leideが繰り返される直前、すなわち４つ目と５つ目の文肢の切れ目で歌唱旋律には２分休符が置かれているが、伴奏においてその休符を補うような偽終止からの２つの４分音符もまた続行を感じさせるものとして、この文構造のまとまりを助けているといえる。（譜例３参照）

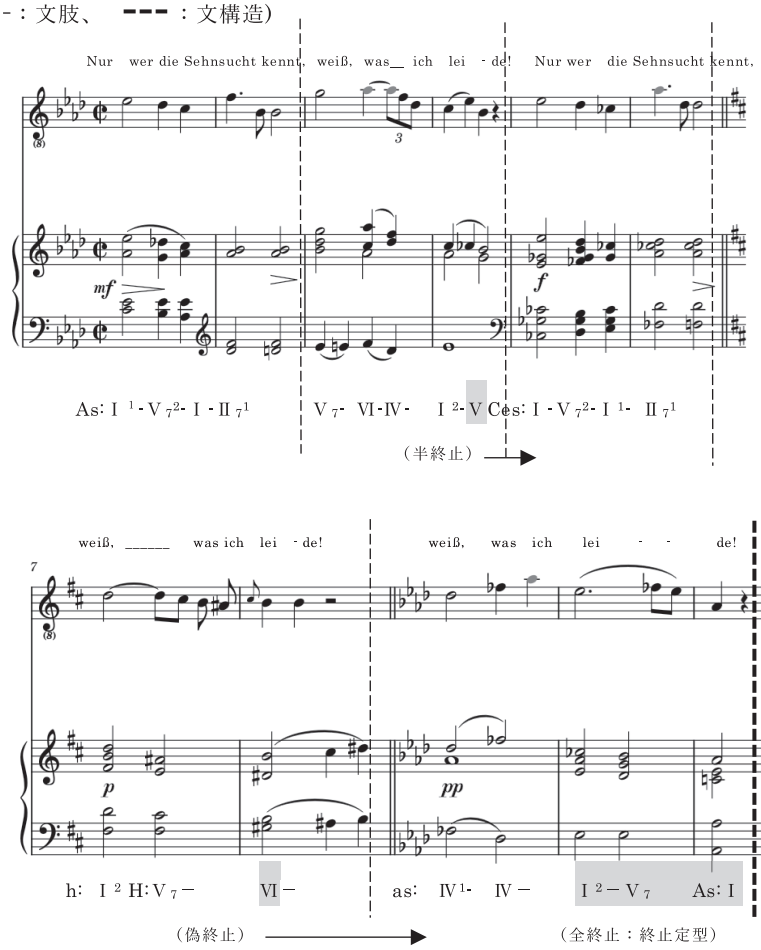
（４）文構造⑤　第２稿（第23－33小節、第11－12詩行）

第21-22小節の間奏において伴奏上声部に３連符の音型が現れるが、この伴奏音型は引き続きそのまま文構造⑤を範囲づけする。間奏は第１稿にはなかったものである。第11-12詩行をシューベルトは冒頭で行ったのと同様に一つの文として捉え、ここでもまた詩行を区切り直している。der nur weißの挿入はゲーテの詩には現れない（図１ ⑤[2]参照）。

１回目のNur－leideには文肢の切れ目を表す転調はなくF-Durで統一されている。つまりここでは歌唱旋律にも伴奏にもシンメトリー分節法は見られず、文肢よりもむしろ文構造のまとまりのほうが強調されている。一方２回目の場合、文肢ごとにAs-Dur－as-moll－f-mollと転調しておりその切れ目がわかる。しかしながらこれらの文肢は、まず１回目のNur－kenntとweiß－leideは属和音で繋げられ、２回目の場合も同様である。さらに１回目と２回目の間もまた半終止で繋げられ、シューベルトの加筆部分のder nur weißを含む最後の文肢は、２回目のweiß－leideが偽終止することで続行を可能にしている。したがって、各文肢が転調によって際立たせられているにもかかわらず、この文構造⑤はバスの音型と和声進行によってまとまりが表現されている。（譜例４参照）

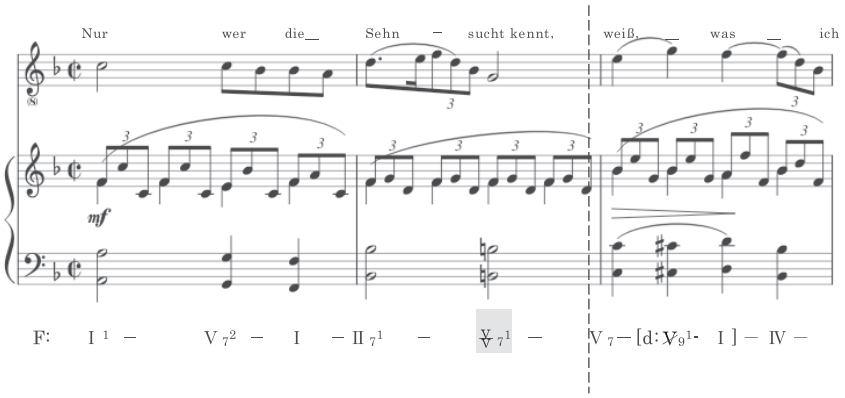
譜例３　Ｄ 310（第１稿）文構造⑤（第20－30小節、第11－12詩行）

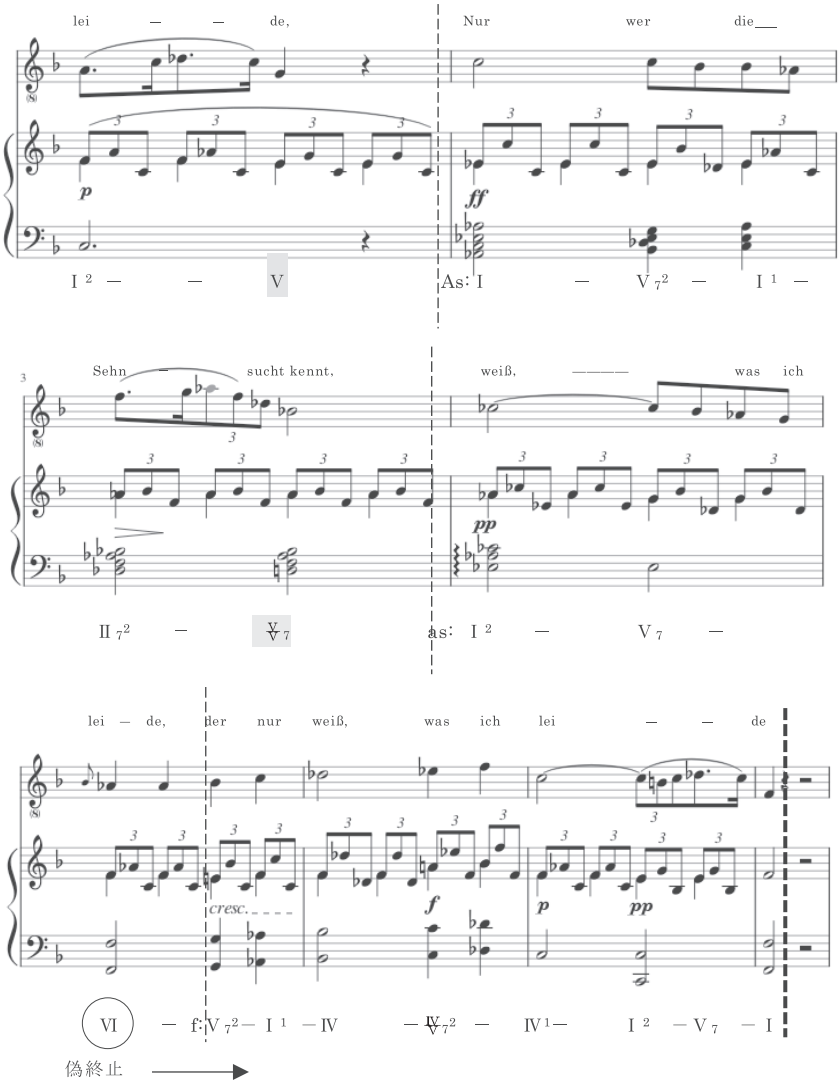
（---：文肢、　**---**：文構造）



譜例４　Ｄ 310（第２稿）文構造⑤（第23－33小節、第11－12詩行）

（---：文肢、　**---**：文構造）





5．結語

本論は、ゲオルギアーデスの「文肢Glied」の概念を参考に、フレーズ、詩行、統語構造の切れ目に注目してシューベルトの≪憧れ *Sehnsucht*≫D 310の最初の二稿の比較分析を試み、以下のような結果を得た。それによれば、12詩行から成るゲーテの詩は統語論に基づいて５つの文に分割され、さらにそれらの文は文肢によって細分化されうる。第１稿と第２稿を比較すると、シューベルトの音楽的表現形態は、改稿を通してそれぞれに多様であり、とりわけ第２稿はレチタティーフや間奏を含み、終結部の変奏もより豊かであった。しかしながら構造の点からみれば、いずれも５つの文に基づく音楽的構造を呈しており、それらの切れ目は主に伴奏音型によって表された。また各文を構成する文肢も変わらず維持され、主に歌唱声部における休符や、伴奏声部における調性の変化によってそれらの切れ目が表された。ここで重要なのは、ゲオルギアーデスの文肢の概念は、シューベルトの詩の捉え方の一側面を浮き彫りにすることである。D 310の二稿における詩の区切りと付曲の関係性が示すように、シューベルトは詩を芸術作品としてよりも、むしろ「現実的なもの Reales」（Georgiades 1967: 24）として捉えようとした。したがって改稿は「言葉の営みそのもの das Leben und Weben der Sprache selbst」（a.a.O: 104）、すなわち「発話 Sagen」（ebenda: 104）を音楽によって実現することへのさらなる追求であり、それゆえ統語構造における各文肢は、第２稿において反復や独自の詩句の挿入によって新たな切れ目を創り出しながらも、シューベ

ルトの付曲によってそれぞれに関連付けられ、より豊かな音楽表現を生み出している。このことからD 310の二稿は詩とは異なる統語構造を獲得しているといえる。しかしながらここで改めて認識すべきは、ゲオルギアーデスが「言葉の構造と詩の構造とは、詩の中では観念的にのみ別の要因として区別されるにすぎない。詩の現実とはこの二つの要因を一つの詩の中に併せ持っている。」(Georgiades 1967: 24) と述べていることである。彼はまた、文肢間の繋がりは「単に意味を区別する言語として、分節している文の流れを反映するのではなく、継続している表出を、また内容から規定される気分、言葉の湧出としての雰囲気を反映している。」(a.a.O: 22) と述べている。すなわち彼によれば、シューベルトのリートにおいて、統語構造に基づいて一旦分節された各文肢は、単に一つの文を形成することだけでなく、詩形式や内容から構築された詩の構造を反映して再び繋ぎ直されることで、新たに詩とは異なる固有の構造を獲得する。つまりゲオルギアーデスの文肢論は統語構造と詩の構造の両側面からの分析点を包括している。本稿は統語構造に基づく分析に留まったが、今後≪憧れ*Sehnsucht*≫の更なる改作も視野に入れて、詩と統語を不可分のものとして捉えた分析を課題としたい。

【後注】

(1) リートの日本語題名は『ニューグローヴ世界音楽大事典』第8巻, 講談社 (1993) の「シューベルト,フランツ」の項で挙げられているものを採用した。

(2) こうした考え方は、19世紀のドイツにおいて「文肢に基づく統語論」の発展の中心であったベッカー (K.F. Becker 1775-1849) が、文を構造として捉え、それを構成する諸要素の果たす機能について論じている点と通じるものがあると思われる。H.グリンツ (Hans Glinz 1913-2008) の著書によれば、言語における根源的文肢は存在の概念を持つ主語と活動の概念を持つ述語であり、これらが二つの概念を結びつけて一つの観念を成すことによって文を作る。その際、文の構成は主語と述語を中心とした「述語的」「付加語的」「目的語的」の三つの「文章関係」から成立する。文中に現れる諸要素は、このうちのどれかの関係となることで文肢として文中で機能を果たす。(Glinz 1947)

(3) ゲオルギアーデスのD 768の分析における「文肢」の考え方は、「構造」が基盤となっている。リートが半小節単位で付曲がなされている点と、その2小節構造に適合された言葉との関係から論じられている。その際、2小節構造は詩行の切れ目ではなく、文構造の切れ目に相当していること、またさらに細分化されうるフレーズの切れ目にも着眼し、そこに文構造の構成要素としての「文肢」の概念を適用させている。

(4) W.ヴィオーラによる≪菩提樹 *Der Lindenbaum*≫D 911-5の分析は、詩の内容から詩節を過去・現在・未来に分け、それと音楽との関係を分析している。W.Wiora *Das deutsche Lied*, Wolfenbüttel und Zürich (1971), 日本語訳 石井 不二雄 (訳)『ドイツ・リートの歴史と美学』, 東京: 音楽之友社: 162-173. (1973)

W.デュルは、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』第2巻第13章における詩Wer sich der Einsamkeit ergibtについて、ゲーテの詩の内容と韻律構造との関係や、シューベルトの音楽が韻律を大きく逸脱している点を指摘している。W. Dürr *Das deutsche Sololied im 19. Jahrhundert Untersufungen zu Sprache und Musik* (1984), 日本語訳 喜多尾 道冬 (訳)『19世紀のドイツ・リート その詩と音楽』, 東京: 音楽之友社: 82-97. (1987)

(5) このことについてはW.BodendorffがSchubert-Enzyklopädie (2004) において指摘している。

(6) 音名は原則としてドイツ式音名表示を採用した。例 ハ音はc音、上1点二音はd^1音、ヘ音はF音等。

(7) ゲオルギアーデスは、歌唱旋律や伴奏においてリズムや旋律の反復形、あるいは変化 (奏) 形が並列する場合、それらはシンメトリーな関係にあり、それらの間には一種の切れ目が生じると述べている。

(8) 譜例は全て*Franz Schubert Neue Ausgabe sämtlicher Werke*, Kassel: Bärenreiter. (1982) に基づき、筆者が作成した。丸印などのマークの付加、歌詞、和声記号は、全て筆者による。

【主要参考文献】

BENGEN, Irmgard

2002 "GEORGIADES, Thrasybulos Georgios", *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Personteil 7, Stuttgart: Bärenreiter-Verlag: 750-752.

BODENDORFF, Werner

2004 *Schubert-Enzyklopädie*, Erster Band, hg. von Ernst Hilmar und Margret Jestremski, VERLEGT BEI HANS SCHNEIDER: Tutzing: 241-242.

DÜRR, Walther　デュル, ヴァルター

1984 *Das deutsche Sololied im 19. Jahrhundert Untersufungen zu Sprache und Musik,*

1987　日本語訳『19世紀のドイツ・リート その詩と音楽』喜多尾 道冬（訳), 東京: 音楽之友社: 82-97.

GEORGIADES, Thrasybulos Georgios

1954　*Musik und Sprache − Das Werden der abendländischen Musik dargestellt an der Vertonung der Messe*, Berlin; Göttingen; Heidelberg: Springer-Verlag.

1967　*Schubert ; Musik und Lyrik*, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

GLINZ, Hans　グリンツ, ハンス

1947　*Geschichte und Kritik der Lehre con den Satzgliedern in der deutschen Grammatik*, Bern: A.Francke AG.Verlag.

2010　日本語訳『ドイツ語文法における文肢論の歴史と批判』大木 健一郎（訳); 宮下　博幸, 人見　明宏（改訳), 東京: 郁文堂: 74-84.

GOETHE, Johann Wolfgang

1992　*Johann Wolfgang Goethe Sämtliche Werke. »Wilhelm Meisters theatralische Sendung« , »Wilhelm Meisters Lehrjahre« und die»Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten«*, hg. von Wilhelm Voßkamp und Herbert Jaumann, Deutscher Klassiker Verlag: Frankfurt am Main: 603-604.

KRAUSE, Christian Gottfried

1752　*Von der musikalischen Poesie*, Berlin: 48.

村田　千尋

1984　「有節と通作―芸術リートの成立 その３―」,『音楽学』30(2), 145-160.

SCHUBERT, Franz

1982　*Neue Ausgabe sämtlicher Werke*, hg. von der Internationalen Schubert-Gesellschaft, vorgelegt von Walther Dürr, Serie　Ⅳ: Lieder, Band 3・Teil b, Kassel: Bärenreiter: 218-221.

WIORA,Walter　ヴィオーラ, ヴァルター

1971　*Das deutsche Lied*, Wolfenbüttel und Zürich.

1973　日本語訳『ドイツ・リートの歴史と美学』石井 不二雄（訳), 東京: 音楽之友社: 162-173.